

病理所見の書き方：総論

1. 所見の記載方法は様々で決まりはない 読みやすく、一貫したスタイルで。
2. 簡潔に 殆どの標本は、7文以下で表現できる。
3. 大きなものから小さなものへ書き進める「逆ピラミッド型」
主たる現象を最初に、附属する変化を後に。
4. 読む人の側に立って書く 所見を読んだ人が、その所見をもとに診断できるように。
5. 組織名を簡潔に記載する 観察している組織は何か。
6. それぞれの臓器を一貫した方法で表現する
各臓器を構成成分に分解し、毎回同じ手順で所見を書けば、病変を見逃すことはない。
例：肺は5つの成分：肺胞腔、肺胞中隔、気道、脈管、胸膜。全ての構成成分を観察すること。
7. 標本上に観察される全ての細胞やパターンを記述する必要はない
主たる細胞を所見にとること。
例：殆どの細胞が不明瞭な細胞境界をもち、一部の細胞が明瞭な細胞境界をもつ場合は、「主に不明瞭だが、一部は明瞭」ではなく、「細胞境界は不明瞭」でよい。
8. 正常組織について記述しない
また、無いものについて書く必要はない。 例：「血管浸潤を示唆する所見はない」。
9. 正しい用語を使う
解剖用語、原虫や線虫の特徴、炎症や細胞死の特徴、その他の表現を含む。
用語が正確であれば（診断名や原因が分からなくても）、客観的な情報が読者に伝わる。
10. 大きさと形について記述する。
多少の推定は構わない（何も言わないよりはずっと良い）。
例：住肉孢子虫は「 $1 \times 2 \mu\text{m}$ の好塩基性、バナナ型の原虫」と表現できる。
11. 病変を解釈することを恐れない
ただし、括弧付きにするなどして、所見と区別すること。
例：「脆弱な好酸性の線維状物（線維素）が胸膜を覆う」
12. 冗長な表現や無駄な用語を使わない
分かりづらく、読みたくない。 例：「色は青色で…」、「～に関連して…」。
13. 小さなことが重要：綴り、句読点、文法
これらが文章の流れを作る。流れのある記述は、要点を得ている。
14. 読みやすい字を書く 読めなければ、書いた意味がない。
15. 何も分からなくなったら、基本に戻る。
何かしら多いものを探す、あるいは足りないものを探す
（組織に何かの要素が増えると、他の要素が失われる）

病理所見の書き方：腫瘍

臓器名：臓器名が不確かな場合は、組織所見と解釈を簡潔に述べる。

1 文目：弱拡大の所見（腫瘍の所見として最も重要な一文で、以下の所見に流れを作る）

1. 部位。
切除縁まで病変が広がっているか？
組織内の1つの領域に限局しているか（例：灰白質、腎臓皮質）？
2. 大きさ（重要な表現要素）。
3. 細胞密度が高い or 低い
4. 境界が明瞭 or 不明瞭
5. 形（結節性、多巣性、疣状など）
6. 膨張性 or 浸潤性
7. 被膜あり or なし

2 文目：細胞のパターン、間質の種類

- A) 腫瘍の分類により、それぞれ特徴的なパターンをとる
 1. 癌 – 巣状、小包状、多房状、索状
 2. 腺癌 – 管状、腺房状、篩状
 3. 肉腫 – 束状、錯綜状
 4. 円形細胞腫瘍 – シート状
- B) パターンの所見を修飾「密な小包状」、「粗に配列」。
- C) 間質（線維性、線維血管性、繊細な、粗な、など）。必ず間質の所見を加える。

3 文目：細胞の特徴

- A) 形（円形、紡錘形、卵円形、立方形、多角形、多形性）
- B) 大きさ（重要な表現要素）
- C) 細胞境界（明瞭 or 不明瞭）
- D) 細胞質
 1. 量（乏しい、中程度、豊富）
 2. 色（好酸性、好塩基性、赤色、青色など）
 3. 特徴（均質、線維状、顆粒状）
- E) 核
 1. 形（円形、卵円形、細長い、紡錘形など）
 2. 細胞内の位置（中心、辺縁）
 3. クロマチンの分布（細かい点状、粗い点状、凝集、小胞状など）
 4. クロマチンの染色性（濃染、繊細）
- F) 核小体
 1. 数
 2. 色

4 文目：特徴的な所見

多核細胞、細胞の多様性（核大小不同、細胞大小不同、巨大核など）

5 文目：有糸分裂活性

- A) 有糸分裂像は高倍率____視野あたり____個（1 視野平均____個）
- B) 異型分裂像

6 文目：悪性所見

- A) 脈管内浸潤
- B) 被膜内浸潤
- C) 壊死
- D) 出血

7 文目：摘み残した所見、二次的な変化。

- A) 炎症
- B) 潰瘍
- C) 出血
- D) 石灰化
- E) その他

病理所見の書き方：非腫瘍性病変

臓器名：臓器名が不確かな場合は、組織所見と解釈を簡潔に述べる。

部位、分布、大きさ（これらの要素が全て含まれていなければ、内容の乏しい所見になる）

構成要素

- A) 重要な順に構成する細胞を挙げ、関連づけて記載する
（例：多数の変性した好中球の周囲に、やや少ない数のマクロファージ、リンパ球、
形質細胞および稀に好酸球やランゲハンス型巨細胞が取り囲む。）
- B) 細胞成分
細胞の名前を使うこと。
「単核細胞浸潤」「非化膿性炎症」「亜急性炎症」などの曖昧な表現は避ける。
- C) 非細胞成分
細胞成分と同じく重要な要素（線維素、水腫、出血、細胞破砕物）
- D) 構成成分の量
少数、中程度、多数
- E) 所見についての解釈を加えてもよい
（例：血管壁において少量の淡好酸性、顆粒状物質を認め、少数の好中球と細胞破砕物を混じる（フィブリノイド壊死）。）

原因物質（病原体）

- A) 部位
- B) 大きさ、形（重要な表現要素）
- C) 解釈（桿菌、球菌、真菌の菌糸、など）
- D) 封入体（好酸性、好塩基性、円形、不定形、細胞質内、核内）

病理組織学的診断

病理診断名には様々な記載法があり、施設により異なる。

(例：AFIP 診断は網羅的で長い診断名を付けることで有名)

1. **部位** (「腎臓、糸球体」、「脳幹、室傍核」あるいは単純に「肝臓」などと記載する)
2. **病変** (浸潤細胞を表す修飾語を付する「化膿性皮膚炎」、「好酸球性肉芽腫性心筋炎)
3. **期間** (急性、亜急性、慢性、慢性活動性)
4. **分布** (限局性、多巣性、多巣性から癒合性、びまん性)
5. **重度** (極めて軽度、軽度、中程度、重度)
6. **腫瘍** (腫瘍診断は、部位と腫瘍の種類を記載する「脛骨：骨肉腫」、「皮膚：形質細胞腫」)

病理診断書の例

バーチャルスライド V1DHE

臓器：肺

肺の広い範囲で、気管支および肺胞内に重度の炎症細胞浸潤を認める。主に好中球が浸潤し、マクロファージが散見される。うっ血および出血を認め、肺胞内に漿液が貯留する。気管支上皮細胞の線毛に多数の細菌が付着する。

病理組織診断：細菌性化膿性気管支肺炎（重度）

総合診断（疾患名）：ボルデテラ肺炎

バーチャルスライド V8FHE

臓器：乳腺

皮下組織において多巣状に腫瘤を形成し、線維性被膜を超えて腫瘍組織が浸潤性に増殖する。腫瘍組織は管状または篩状を呈し、細胞配列の不整および線維性結合組織の増生を認める。腫瘍細胞は多形性を示し、細胞境界が不明瞭、大型の核に明瞭な核小体を有する。核は大小不同を示し、しばしば多核細胞や核膜不整を認める。有糸分裂像および異型分裂像を多見する。腫瘍組織の中心部は壊死し、被膜に浸潤する像を認める。腫瘍組織の周囲において、出血およびリンパ球などの炎症細胞浸潤を認める。

病理組織診断：乳腺癌

総合診断（疾患名）：乳腺癌